

動作単位産出システムの分裂と統合における質的变化

鈴木信一（IRCP 客員研究員）

要旨：自閉症の特徴を持つ成人と筆者はデュオで即興ダンスを踊った。同成人は「日常生活において学習した習慣的動作」のみを遂行し、「踊る」という言わば抽象的な動作を遂行することはなかった。しかしある気づきを契機として、(1)習慣的な動作単位産出システム¹の分裂、(2)分裂し無意味化した複数の動作単位産出システムによるカップリング・システム²の起ち上げ、(3)従来と質の異なる動作単位産出システムへの統合、(4)統合時における概念の産出、という一連の過程を経て、同成人固有の「踊る」という動作を産出した。筆者は上記の様相を記述し、同記述に基づき動作単位産出システムのモード及び質の変化をモデル仮説として提示する。

キーワード：即興ダンス、動作単位産出システム、分裂と統合、質的变化、概念産出

本論文では岩下徹³（即興舞踊家、山海塾舞踏家）指導による即興ダンスセラピーのワークショップ⁴における自閉症の特徴を持つAさんの事例を取り上げ、習慣的な動作単位産出システムが分裂し、新たな動作単位産出システムへ統合される過程を記述し、システムの在り様の変化とそれに伴う「日常生活の習慣的な動作」から即興ダンスを「踊る」という動作への質的变化を検討し、創発の一形態をモデル仮説として提示する。

1 Aさん（30歳台、男性）の現在までの経緯

2011年までAさんはワークショップにおいて、「日常生活における習慣的な動作」を行なっていた。即興ダンスという言わば抽象的な動作は行なったことがなかった。即興ダンスを遂行する他者と踊る時も「日常生活における習慣的な動作」で関わることを試みる。つまりAさんには即興ダンスの遂行と日常生活との間に境界がなかったものと推測できる。その現れとして、即興ダンスによるAさんとの連動を他者が試みるなかで、その試みの途中であってもAさんは日常の会話モードで相手に話しかけつつ歩み寄り、試みを中断することもあった。

その一方でAさんは他者との関わりにおいて自らの存在を「閉じている」ことは少なく、むしろ「開いている」ことの方が多く、積極的に他者に分け隔てなく関わる。しかしその関わりから、ちぐはぐな関係が生じる場合も少なくなかった。他者との関わりに積極的である一方、一人の相手とじっくり関わることは少なく、相手と少しの時間関わっては別の人の所へ移動し、そこで少しの時間関わり、再び別の人の所に移動する、という関わり方をワークショップの最中に繰り返した。

またAさんは他者同士を結びつけようとする気遣いを頻繁に行う傾向を持っていた。Aさんは他者の手首を強い力（意図的ではなく、力の入れ具合が調整されていない）で掴み、紹介したい他者の所

に連れていき、お互いを紹介するという形で両者の間に関係を作ろうと試みる。その結果、トリオやカルテット、集団で踊る際、小さな混乱が起こる場面も見られた。

2012年から、デュオにおいて他者の近くに居続けることが“できる”ようになるが視線は相手に持続的に集中することがなく、途中から別の他者に注意が向き、そちらに自らを移動させることもあった。

2013年には他者に視線を持続的に集中し、他者の動作単位⁵を模倣するようになった。Aさんは「他者に持続的に集中する」という態度を学習し習慣化することで、他者と連動する開始条件を獲得し、他者の動作単位を模倣する形でカップリング・システムを他者と起ち上げることが可能となった。

それ以後、他者に持続的に集中しつつ、自分の足の甲の端と他者の足の甲の端を付けるという仕方で自己を「配置」し、他者と「接触する」という構成素によりカップリング・システムを起ち上げるようになり、その結果他者と安定した関係が生じるようになった。以後この足の甲の端を接触させ、それを維持するという形の他人との関わり方、いわばスタイルをAさんは産み出し、他者に連動を求められるとそれを頻繁に行っていた。この動作におけるAさんの他者との「接触」はしっかりとしたもので、「あなたに関わっていますよ」という態度がその動作と眼差しから感じ取られた。そこでは「日常における習慣的動作」により強い強度のカップリング・システムが他者との関わりの中に起ち上がっていた。同スタイルの繰り返しにより、動作において他者と連動する感触を得たのではないかと筆者は推測する。その後も「配置」と「接触」を活用し他者との連動を行い、現在に至る。

以上みてきたように、Aさんは「日常生活における習慣的な動作」により他者と連動を試み、カップリング・システムを起ち上げてきた。本論文で取り上げるのは2020年に見られたAさんによる「踊る」という抽象的な動作単位の産出とその産出までに至る過程についてである。

2 2020年におけるAさんの変化

前述の通り、従来からAさんの動作は「日常生活における習慣的動作」の範疇にあり、他者とカップリング・システムを起ち上げている時でさえ、習慣的な動作単位で遂行していた。しかし2020年9月のワークショップでは習慣的な動作単位とは異なる抽象的な動作単位を産出した。

同回のワークショップにおいてAさんは、従来の日常生活における「歩く」、「走る」という動作単位の範疇から一步踏み出て、即興で「踊る」という動作単位を新たに産出した。その過程を大まかに順序立てると次のようになる。(1)習慣的な動作単位産出システムの分裂、(2)分裂し無意味化した複数の動作単位産出システムによるカップリング・システムの起ち上げ、(3)従来と質の異なる動作単位産出システムへの統合、(4)統合時における概念の産出、である。以下、各プロセスの実践内容の記述に沿って考察を試みる。

(1) 習慣的な動作単位産出システムの分裂

【記述】

Aさん、ダンサー二人、筆者の四人でカルテットを行う。Aさんと筆者は隣接し、両者は足元に共同注意を向けつつ、筆者が最初に右足を特定の場所「ここ」に配置する。次に筆者の「ここ」の近くにAさんが右足を「配置」する。二人はこの連動の形を自発的に7、8回反復した。その後、他の場所でデュオを行っていたダンサー二人がAさんと筆者に近づいてくると、Aさんは各々のダンサーに向け歩いたり、走ったりという動作を繰り返した。その後ダンサー二人と筆者はカルテットに区切を付けるべく、Aさんを囲みつつ、ダンサー二人と筆者は相互の背中を追いかけつつ徐々に移動しながら観客席（参加者が見ている場所）に戻っていった。

カルテットの遂行後、Aさんは観客席から眼前で即興ダンスを行う参加者一人ひとりの動きを見ながら「うまいな～」、「いいな～」と発言する。従来もAさんは参加者の動きに注意を向け「Bさんが、ほら」と言いつつ指さしていたが、評価を伴う言葉に筆者は驚き、他者の動きへの捉え方が変化した可能性があるかと推測した。

【考察】

ワークの前半においてAさんと筆者はお互いに自己の足を他者の足に隣接する形で「配置」という動作単位の反復を持続した。この過程を通じ「配置する」という動作単位のみを前景化し、注意し、ひとつの動作単位として言わば“切り出し”、抽出したと考えることができる。この“切り出し”、抽出作業は習慣的な動作に亀裂を走らせる行為と言い換えることができる。この動作単位の“切り出し”、抽出は、日常生活において特定の動作単位が前景化し他の動作単位が背景化する過程とは質、強度、構造の異なるものであり、動作単位産出のモードを大きく変えるものと(2)において後述するAさんの行動から推測する。

自閉症や知的障がいを伴っている他のワークショップ参加者の多くは「日常生活における習慣的な動作」と「踊るという動作」を区別し、参加者が踊り始めると動作のモードを換えていると彼らの一連の動作、態度の変化から筆者は推測している。しかし2020年9月のワークショップ以前のAさんは前述したように「日常生活における習慣的な動作」と「踊るという動作」という区別をしていなかったとAさんの一連の動作、態度から推測する。それは動作単位の差異ではなく、即興で「踊る」という概念自体を今回の出来事以前に持っていなかったのではないかと。「配置する」という動作単位の“切り出し”、抽出作業のうちにAさんはそれら動作単位が持つ概念の差異、「日常生活における習慣的な動作」という概念と即興で「踊る」という概念の差異に気づき、両者の区別を自ずと形成したのではないかと。言い換えると「配置」という動作単位の反復により日常生活の動作に亀裂が生じたことにより、動作単位産出のオペレーションがリセットされ、日常生活における「歩く」、「走る」といった動作単位に伴う概念とは異なる、即興で「踊る」という概念を産出し、その結果Aさんは両者の差異に気づいたものと筆者は考える。

そしてその“切り出し”、抽出作業の後、Aさんはこれまで他の参加者の「踊り」に属する動作に対し、観客席から指で指示することはあったが、即興で踊る参加者を指で示しつつ「うまいな～」、「いいな～」といった感想や評価を伴う発言を述べることは初めてであった。“切り出し”、抽出作業において動作単位を切り出した後、日常的な動作単位と他の参加者が産出する即興で「踊る」という動作単位の差異への気づきを起点として、そこからAさんと他の参加者が即興で「踊る」という同じ地平において関係を持つことが可能となり、他者の動作単位を評価する言葉を参加者たちに投げかけ始めたものと筆者は考える。

(2) 分裂し無意味化した複数の動作単位産出システムによるカップリング・システムの起ち上げ

【記述】

再び同じメンバーでカルテットを行う。開始の時点でAさんと筆者、ダンサー二人という形で踊ろうとしたが、Aさんは突然走り始めた。その「走る」という動作はこれまで行なってきた日常的な走り方ではなく、それぞれの手足がばらばらに動きつつ、その勢いで前進するというものであった。そこに「走る」という従来行っていた日常的な型はなかった。筆者はその変化を型の消失として受け取った。各々の手足の動作の勢いの結果として前進するという形は「走る」という範疇に収まるものではなかった。しかしバランスを崩すことなく、日頃に比べ各々の手足の動作の幅は大きく、より高く、力強かった。Aさんの表情、眼差しは真剣なものと筆者は受け取り、その斜め後ろからその動作に隣接し動作を進めた。Aさんの手足それぞれの動作にいわゆる型により可能となるリズム性はなく、それぞれの手足が独自に反復を行っていた。そのような激しい動きのなかにあっても全身のバランスを保ちながら少しずつ前に進んでいった。それぞれの動作が連動していると筆者は推測した。その連動の仕方はバランスを崩さないように調整する役割を担っているものと推測する。筆者はAさんの動作の輪郭を模倣するように試みつつリズム性を伴い動いた。日頃からAさんは日常の歩き方や走り方にリズム性を持っている。そのリズム性の消失も型の喪失と同様に筆者にとって驚きであった。Aさんは以上の「リズム性を持たない移動」を約20メートル持続した。その後、筆者と二人のダンサーはAさんを円形に各々の動きで囲みながら観客席の方に戻っていった。

【考察】

Aさんが産出した動作はおおよそ4つに分裂していた。右手、左手、右足、左足、それぞれが異なる動作単位を産出した。つまり、(1)で行った足の「配置」という動作単位の“切り出し”、抽出作業により生じた亀裂がひとつの動作単位産出システムの分裂へと拡大したものと筆者は考える。右手、左手、右足、左足、それぞれが自律した動作単位産出システムを持ち、各々に動作単位を産出する。だからと言ってバランスを崩し倒れることはない。しかし「一つのからだが動く」という出来事がそこで起こっているのではなく、「右手、左手、右足、左足、それぞれが動く」とい

う出来事が起こっているのである。そしてそれぞれが連動している。4つの動作単位産出システムにおいて「バランスを取る」という構成素を持つカップリング・システムが自ずと起ち上がり機能しているのである。

Aさんは「走る」というひとまとまりの動作単位ではなく、右手、左手、右足、左足それぞれが各々ひとまとまりの自律した動作単位を産出するシステムにより動かされていた。結果として、それぞれの手足は自由奔放に動き、様々な輪郭を描きつつもそれら動作の持続のうちに「走る」、「進む」といった意味を持たない状態が現われていた。つまり動作単位の「無意味化」である。何の意味もなく動く。それは「即興ダンス」そのものである。何らかの目的を持ち恣意性のもとに動く場合、動作単位は何らかの意味を伴う。それら動作単位の反復により「日常生活における習慣的動作」が形成される。つまり「配置」の動作単位を反復し“切り出す”という行為は無意味化の作業であった。その無意味化の作業そのものにAさんは気づき学習したのではないか。以前のAさんの動作の殆どは目的を持ち恣意性を持ち、動作そのものがメッセージ性を保持していた。それらを剥ぎとった状態を経験し「無意味な動作」を学習し、「無意味な動作」を他の参加者が行っていた「踊る」という動作単位と紐づけ、右手、左手、右足、左足それぞれにおいて「無意味な動作」を自ずと実践した、という道筋を考えることができる。

(3) 従来と質の異なる動作単位産出システムへの統合

【記述】

その後、岩下氏がソロで踊りたい人を募ったところ、Aさんが手を上げソロを踊ることとなる。これもAさん自身、そして参加者にとって初めての出来事であった。

Aさんは参加者（観客）の方を向き、体育室（25メートル×30メートル）の壁面に自らを位置づけ、自分の右足を周辺に4、5回配置することを繰り返した。その次に壁面中央に沿う方向に身体と視線を向け、身体に力を溜めた後、壁面に沿って直線状に思い切り飛び着地した。Aさんは参加者（観客）の眼差しに常に注意を払っていることに筆者は気づく。そして再びその位置から、まっすぐその先を見て間を置いた後、壁面に沿って直線状に思い切り飛び着地した。着地後、参加者（観客）側を見る。この時点でひとまとまりのソロ作品として岩下氏は声掛けをして動作を終了した。この一つの動作単位の反復は(2)で記述した左右の手足それぞれがばらばらに動く分岐した状態からほぼ休むことなく行われたソロであり、動作のモードの変化に筆者は驚いた。Aさんの動きは力強く、存在感があり、なにより動作単位の産出に集中しており筆者はそれらがAさんによる彼自身の存在の投げ込みそのものの反復であると推測した。Aさんは目の前に向け強い度合いで集中し、“ここ”という位置に自らを（幅跳びをする輪郭を伴い）投げ込む動作を丁寧にいった。Aさんのこれら一連の動作は従来のワークショップのなかで初見であり、それら動作は「日常生活における習慣的な動作」ではなく、いわゆる即興ダンスの動作であった。

【考察】

「無意味」な動作単位とその反復という在り様への気づきと複数の動作単位産出システムによる「無意味な動作」の実践から、Aさんはただ自らの存在を投企するという行いを遂行する形で、新たなモードの動作単位産出システムを統合した。つまり「有意味な動作単位産出システム」から「無意味な動作単位産出システムへの分裂」、「無意味な動作単位産出システム」への統合という過程を通じて、新たなモードを創発したのである。そのモードは「無意味な動作」の実践そのものであり、言い換えれば「即興ダンス」の実践そのものであった。「無意味への気づき」からAさんは自らの存在を投企する「ここ」という場所に集中することにより、そこに以前の有意味な周囲へ注意は消失した。記述において記した、彼自身の存在の投げ込みそのもの、とは言わば本来的な在り様における投企にあたる。そして本来的な在り様における投企の遂行時においても、ワークショップの参加者という他者の存在と関わり、参加者（観客）に眼差しを送ることで彼らと関わりながら、自らの動作自身に区切りをつけたと考えることができるのである。

(4) 統合時における概念の産出

「無意味な動作単位」の産出は恣意的に「動作単位産出の無意味性」を目指しても実現できるものではない。自ずと「無意味な動作単位」を産出するには動作単位の産出時、すでに動作単位が無意味でなければならない。そこに「有意味性／無意味性」という概念を産出するネットワークの存在可能性が浮かび上がる。動作単位を産出するのに必要な注意、身体イメージ、運動イメージなどの構成素を産出するネットワークと同様に「有意味性／無意味性」という概念の構成素を産出するネットワークが、他の産出ネットワークと相互に連動する。それにより自ずと「無意味な動作単位」の産出が可能となる。Aさんは「無意味な動作単位」の存在に気づき、それにより「無意味性」という概念の産出ネットワークが形成され、他の産出ネットワークと連動する。それにより「日常生活における習慣的動作」の持つ「有意味性」ではなく即興ダンスの持つ「無意味性」が自ずと動作単位に現れたものとする。つまり、「(1)習慣的な動作単位産出システムの分裂」は動作単位の「無意味性」への気づきのプロセスであり、それを「(2)分裂し無意味化した複数の動作単位産出システムによるカップリング・システムの起ち上げ」で動作の「無意味性」を自ずと試行し、「(3)従来と質の異なる動作単位産出システムへの統合」において「無意味な動作単位」の産出を自主的に実現したと考えることができる。そしてその「無意味な動作単位」の産出は『「ここ」という位置への身体の投げ込み』の繰り返し、いわば本来的な投企の実践であり、そこで産出されたのは即興ダンスが探求する「原初的な動作そのもの」であった。

3 無意味性と即興ダンス

即興ダンスになぜ無意味な動作単位を求めるのか。それは他者の動作単位との連動、つまり他者とともにカップリング・システムを他者の動作に円滑かつ即応して起ち上げるために必要不可欠だから

である。有意味性を持つ動作はそこに目的、恣意性、思考が入り込む。それにより自己の動作産出が遅れ、動作単位の選択肢は限定され、他者の動作への適応はぎこちなくなる、あるいは不可能となる。その結果カップリング・システムは起ち上がらないままとなる。つまり、他者との即興の場に求められるのは動作単位の無意味性であり、即興ダンス遂行の間だけ日常生活で培われた習慣的、かつ意味な動作単位から意味を剥ぎ取ることによって初めて、つまり無意味の次元、動きそのものの自由な次元において他者と関わることで、そしてカップリング・システムを起ち上げることが可能となるのである。

¹ 運動単位の産出において常に働く①注意、②運動感・内部感覚の感じ取り、③予期、④身体・運動イメージの形成、⑤配置、⑥肌理・隔たり・方向の調整、⑦反復・リズム化という構成素、状況に応じて積極的に働く①呼吸の調整、②皮膚感触の感じ取り、③表象イメージの形成、④眼差しによる感じ取り、⑤情態性／気分といった構成素のネットワークにより予期、注意、感じ取り、イメージ形成、調整を遂行し、動作単位を産出するシステム（鈴木信一、『即興ダンスセラピーの哲学』晃洋書房、2021、一部引用の上修正）。

² 動作単位を産出するシステムが二つあるいは複数存在し、一方のシステムの産出した動作単位が他方あるいは複数のシステムに構成素として入り込むことにより、その動作単位を産出条件として起ち上がるシステム（鈴木信一、『即興ダンスセラピーの哲学』晃洋書房、2021、一部引用の上修正）。

³ 岩下徹は山海塾に所属する一方で、ソロ活動では舞踏に基づく即興ダンスを踊り、同ダンスによる非健常者、健常者を交えたダンスセラピーに力を入れている。湘南病院で行われて来たワークショップでの即興ダンス実践の過程や出来事、そこから導き出された課題については岩下氏、橋本光代氏（医療法人周行会湖南病院）の共著論文「精神病院におけるダンスセラピーの試み—少しずつ自由になるために」のなかで丁寧な記述がなされている。

⁴ 即興でダンスを行うことにより、動作の選択可能性が拡大するとともに、自らの存在が開いき、各人の“できる”ことのうちに他者と連動することを試み連動可能性が向上する、というセラピー効果を得ることができる。本論文に登場するAさんと筆者が参加する即興ダンスセラピーの概要は次の通りである。参加者は①自閉症、情緒障がい、学習障がい、注意欠陥多動性障がい、知的能力障がいなどを持つ40歳前後の成人、②身体に障がいを持つ者、③舞踏やコンテンポラリーダンス、能、狂言などの舞踊経験者、音楽療法の専門家、作曲家、楽器演奏者、ボランティアスタッフ他であり、障がいの有無にかかわることなく、ソロ、デュオ、カルテットなどを音楽なしで自然音のなかで踊る。

⁵ 「動作単位」とは「歩く」、「瞬きをする」、「食べる」などの動作が成立する為の最小単位である。動きを途中停止することで当の動作は不成立となる。なお本論文では「動作単位」の反復したものを「動作」として表現する。

<参考文献>

- 飯森眞喜雄・町田章一編、『ダンスセラピー』岩崎学術出版社、2004.
- 岩下 徹、「少しずつ自由になるために—交感としての即興ダンスを求めて」『現代のエスプリ』至文堂：165-176、2001.
- 大沼幸子・崎山ゆかり・町田章一・松原豊、『ダンスセラピーの理論と実践——からだと心へのヒーリング・アート』ジヤース教育新社、2012.
- 河本英夫、『オートポイエーシス—第三世代システム』青土社、1995.
- 、『メタモルフォーゼ・オートポイエーシスの核心』青土社、2002.
- 、『システム現象学—オートポイエーシスの第四領域』新曜社、2006.
- 鈴木信一、『即興ダンスセラピーの哲学—身体運動・他者・カップリング』晃洋書房、2021.
- 八木ありさ、『ダンス・セラピーの理論と方法—舞踊心理療法へむけての序説』彩流社、2008.
- 、「精神分裂病者へのダンス・セラピー的アプローチ：身体表出に現れた自己認識の変化」、第41大会号A、日本体育学会：193、1990.
- 、「ダンス・セラピーにおける共感について：即興的身体表現による参加者主導型セッションの試み」、第42大会号A、日本体育学会大会：235、1991.
- Deleuze, Gilles & Guattari, Félix, *L'anti-Œdipe*, Paris: Éditions de minuit, 1972. (=市倉宏祐訳『アンチ・オイディプス』河出書房新社、1986)
- Maturana, Humberto R. & Varela, Francisco J, *Autopoiesis and cognition: the realization of the living*, D. Reidel Publishing Company, 1980. (=河本英夫訳『オートポイエーシス—生命システムとはなにか』国文社、1996)